

# 「離郷門信徒のつどい」の可能性

浄土真宗本願寺派総合研究所 藤丸 智 雄  
横井 桃子

## ◎「離郷門信徒のつどい」アンケートについて

宗門では、寺院活動支援部の支援のもと、「離郷門信徒のつどい」（以下、「つどい」）を各地で開催している。従来、「お寺」の近くに定着していた門信徒が他の地域へと移動する流れが進行しており、そうした方々と「お寺」の関係は希薄化し、また家族形態の変化に伴い「家のなかで育まれた伝承」は崩れつつある。こうした中、地方から離れていった方々を対象に、寺院や組などを単位として、都市部における「つどい」を開催し、浄土真宗との繋がりを強めようと試みられている。

従来、この活動の成果について、十分な検証がなされてこなかった。そこで、2015年4月から2016年3月までの1年間に開催された「つどい」において、アンケート調査を行った。アンケートは参加者と主催者、それぞれに対して行ったが、今回は、参加者に対して行ったアンケートの結果について、横井桃子（浄土真宗本願寺派総合研究所研究助手）

の分析に基づき、分析結果の一部について報告を行う。

（報告の全体は寺院活動支援部へ提出するとともに、それを用いて中央寺院振興対策委員会において、2016年2月・9月の2度にわたり報告を行った）

## ◎調査の概要

調査期間…2015年4月～2016年3月末

調査主体…寺院活動支援部

調査対象者…上記期間内に実施された

「離郷門信徒のつどい」45団体の参加者1129名

調査方法…アンケート票の一斉配布による質問紙調査

調査内容…社会的属性（年齢、性別）、同行者、会場までの所要時間、参加回数、つどいで楽しみにしていること、つどいに期待すること、所属寺に関すること、仏壇に関すること、墓に関すること、

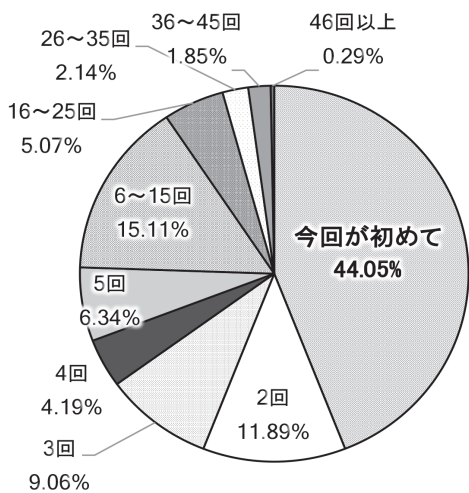


図1 これまでの参加回数 (N=1026)

●参加回数についてー5回以上の参加の方もいる。これまでに参加した回数をたずねると、図1のようになった。「つどい」の開催が近年広がりつつあり、新しく開催し始めた主催団体も多い(2015年度開催53件中、新規開催団体が15件)ためだろう、参加回数が1度という回答が半数近くを占めた。一方で、5回以上参加しているという回答も30・8%にのぼっており、継続的に参加している方の多さも確認できる。

葬儀に関すること

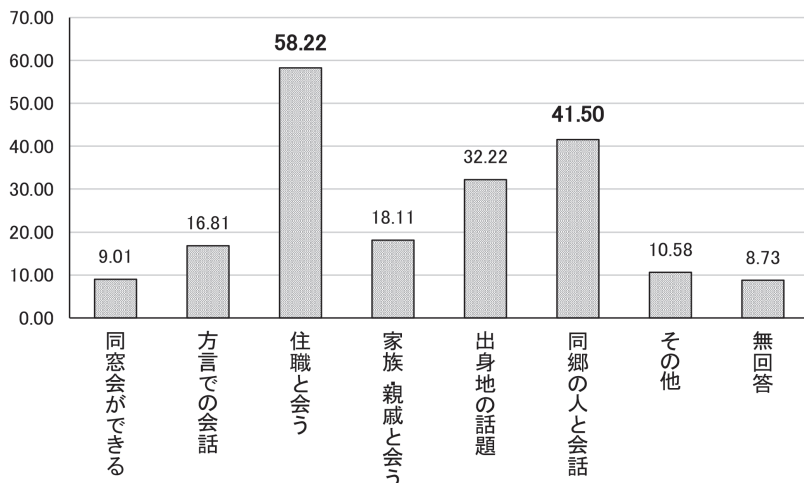


図2 楽しみにしていること (複数回答, N=1077)

●住職に会い、法要に参加する楽しさ。「つどい」開催あたって、主催団体側にはやはり「多くの方々にご参加いただきたい」「来ていただいた方に満足していただきたい」という思いがある。そのため、参加者のニーズを確かめることが大切である。そこで、「つどい」で

楽しみにしていることをたずねる質問が設けられた。

分析したところ、図2の結果が得られた。同郷の人と会えることや出身地のことを話せるといった「故郷」に関する回答も多いが、最も数値が高かったのは「住職と会う」であった。また、「その他」に付した自由記述欄には、「法話を聞くのが楽しみ」「法事ができる喜び」などと多数書き込まれており、「つどい」で住職に会い、法要に参加し法話を聞くということが、「つどい」の重要な要素であることが確認できる。

●所属寺に行ったことがない「つどい」への参加者 図3は、「所属寺への参拝頻度」の結果である。「1年に1回」という回答がもっとも多い。一方で、7・66%の方が「年に10回以上」と毎月のように参拝しており、参拝頻度は「1年に1回」を中心にほぼ左右対称の山型になっている。さて、興味深いのは約9%の方が「行ったことがない」と答えていることだ。

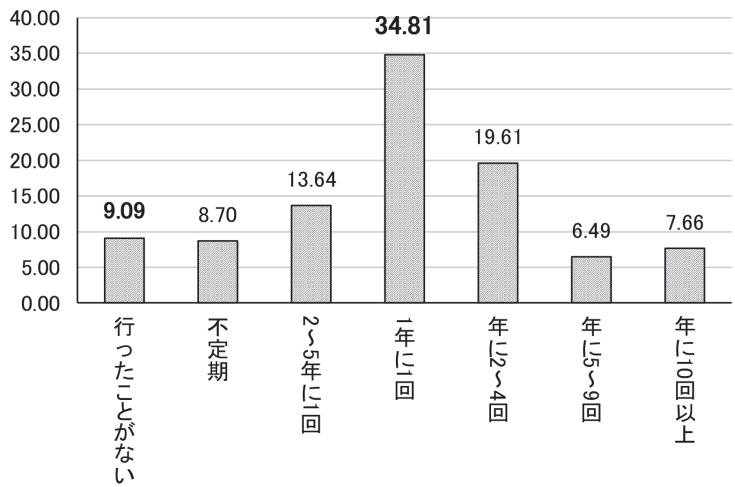


図3 所属寺への参拝頻度 (N=770)

「つどい」については、「転出した第2世代になるとお寺との繋がりは期待できない」「故郷にいる時にお寺に繋がっていなかった方は来ない」という課題が、しばしば指摘される。しかし、実際には1割近くの方が、お寺に来たことがないのに「つどい」に参加している。「つどい」が、新たな繋がりを作り出すきっかけになっている面があると言えるよう。

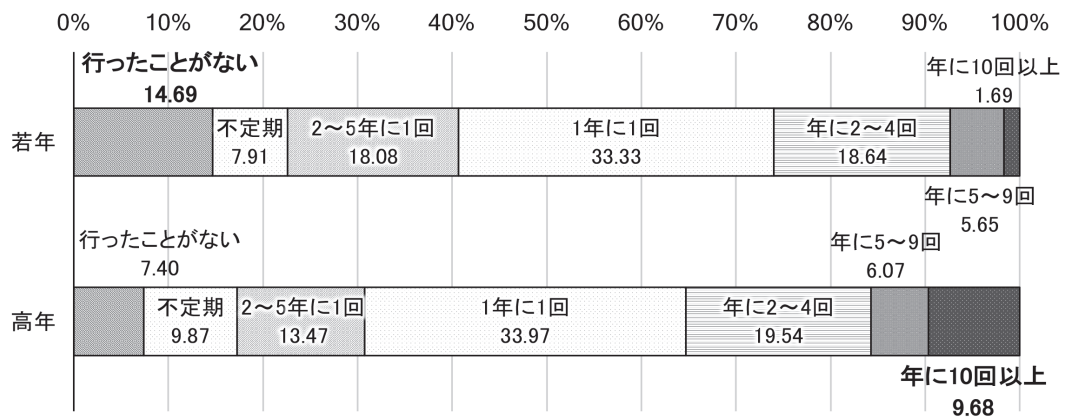


図4 所属寺への参拝頻度 (若年N=177, 高年N=527)

さらに、若年層(59歳以下)に限定すると、約15%が所属寺への参拝経験を持たない。実数で言えば、回答者177人の

内、26人が参拝したことがないと答えたことになる。この数字から、お寺との関係が薄い方へのご縁づくりという面で、一定の成果を見ることができているが、これが本当にご縁になりうるのかという点については、「継続的にお寺に関与していくか」「どのようなご縁となりうるか」について、また参拝したことがない方々が、どのようなきっかけ、目的で参加したのかについてなど、今後の調査で確認していく必要があるだろう。

◎「仏壇あり」が50%

「つどい」のアンケートからは、都市部へ出た方々の宗教事情もうかがい知ることが出来る。その一つが、「仏壇の有無」についての設問である。

各種調査において都市部で仏壇を有する家庭が約40~50%と言われる中で、「つどい」の参加者においては70・3%が保有しているという高い数値となった。しかし、これを若年層(59歳以下)と高年層(60歳以上)に分けると、若年

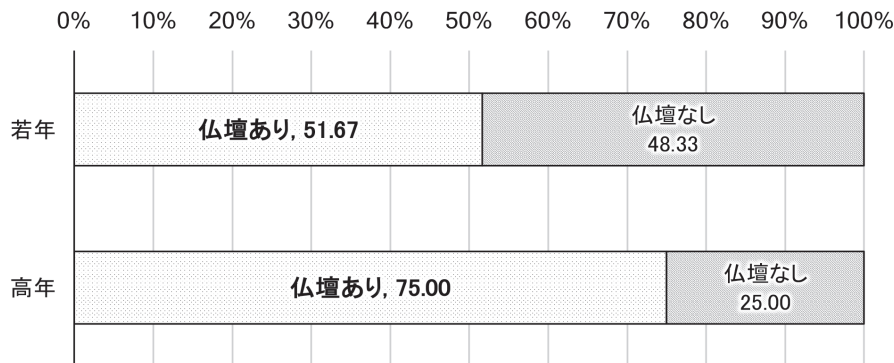


図5 仏壇の有無 (若年N=209, 高年N=688)

層のおよそ半分が、「仏壇なし」と答えている。「つどい」に参加するような、一定程度、お寺との繋がりが想定される家庭においても、日常の中から仏事が消滅しようとしている。こうした状況への対策は急務であろう。

◎「つどい」を継続して欲しい

今回のアンケートでは、「つどい」に期待することをたずねた。選択肢は、「継続」「多くの人の参加」「子や孫の参加」「若い人の参加」「その他」の5つ。この中で、約70%という高い数値を示したのは、「継続」であった。継続して開催して欲しいということを示す高い数値から、「つどい」がおおむね好評であることが分かる。

一方で、「つどい」は「子どもたちへ、お念仏の声をとどけるために」と、理念を掲げ、お寺との繋がりを「細い糸をたぐり、より合わせてもっと太い糸や綱にして」いくことを目的としているのであり、右記の結果だけで「つどい」の成果を謳うことはできない。

この目的に合致した活動としていくためには、「つどい」が次世代への繋がりを生む場になる必要がある。そのためには、「つどい」をどのような場とすべきなのか？ また「つどい」という形態が、本当に効果的な方法なのか？ さら

に開催を継続していくには、主催者側に大きな負担がきまとう。そのため、継続して開催することは、必ずしも容易でない。そうした問題を、どのようにクリアしていくのか。

こうした課題については、引き続き、今回の主催者側アンケートの報告において検証していきたい。

※本稿で掲載した図表について、Nは回答者数を表す。

※「つどい」でアンケートにご協力いただいた方々に、心よりお礼申し上げます。

※本稿で紹介した内容は、横井による分析結果（「報告書」）のごく一部です。報告書では、すべての設問の結果について詳細な分析を行うとともに、回答者を若年・高年に分けて分析を深めています。「報告書」全体については、浄土真宗本願寺派総合研究所までお問い合わせ下さい。